

たまいたま 川柳



りくぎえん
六義園 (文京区)

令和3年 (2021年)
11月号 (No.744)

日川協加盟

巻頭言

耳を洗う(とらふ)こと

誠に騒音の多い世になった。生理学や音響学的な世界だけではなく、情報世界や人間関係の世界でも。その結果??耳の不自由な方が多くなっているが、それは単に聴力だけの事情ではなさそう。

「耳を洗う」と言う諺が中国の故事にある。「世間の汚れた話を聞いたために汚れてしまった耳を洗う」の意で、「俗世間の栄達を嫌い、自分の行いを清くし、正すこと」とある。

中国の聖天子とされる堯帝は、位を隠士の許由に譲ろうとした。しかし許由はこれを承けず、俗事の汚れたことを聞いただけでも耳が汚れたとして、耳を幾度も洗ったという。現代に至るも権力への志向劇は歴史上絶えることがなく、洋の東西を問わない。

そんな史記までを読みこんでいた江戸期川柳人の詠史句に、「耳洗う程な日本に馬鹿はなし」(柳多留一〇三篇)がある。

誠に風刺の効いた句である。江戸市民でこの句を理解して頷く者がどれ程居られたかは判らないが、現代であればどうであろうか。ウイズ&アフターコロナの世に、各国の、為政者トップから始まる権力闘争を見せつけられる国民は、ただ耳を洗うのみである。今年のノーベル平和賞が選択した強権批判の勇気を、高く讃えたい。

今や耳目ともに痛い世間。聞きたくない・見たくない情報が多すぎる。禁足の身にとっては、この先も酷な環境を生きなければならぬ。良寛さまにもなり切れず、時事川柳でも詠みましようか。

願法 みつる

日日是好

井戸端に3密と貼るお役人

罪な身は火で清めるの他はナシ

権力はでかい墓石建てたがり

脳みその真ん中辺に落とし穴

阿行像あきれた世には声も出ず

少子化に生き犬猫と居る

花火師のヒマ自棄で打上げ

酒場休業嘆くゴキブリ

テイクアウトへ市長注文

三年籠もり三杯目出す